

アンプにこだわるギタリストのためのレコーディングツール スピーカー・シミュレーターの実力を探る!

楽器だけでは自分好みのサウンドを出せないことに気付いたギタリストの中にはマイアンプを持っている人も多いのではないだろうか。ギタリストにとってのアンプは単に音を出すためのスピーカーではなく、自分のオリジナリティを確立するための楽器の1つ。ただ一方である程度の音量で鳴らさなければ本来の力を発揮できないというのも事実。ライブならまだしも自宅レコーディングで思い通りのサウンドを出すのはかなり困難だ。そんなアンプにこだわるギタリストにオススメしたいのがスピーカー・シミュレーターと呼ばれる製品。今回は元、子供バンドのギタリストで現在はGRANITE HOUSEで活躍中の谷平こういち氏を招き、マイアンプを手軽に自宅レコーディングできるスピーカー・シミュレーターの実力を検証してみよう。(文：秋山瑞穂 / 編集部)

また、最近ではギターをラインレコーディングする機器としてアンプ・シミュレーターが台頭しているが、アンプシミュレーターとスピーカー・シミュレーターは根本的な考え方が違う。アンプ・シミュレーターはアンプとキャビネット、マイクなどギターアンプ全体を再現するもので確かに便利ではあるのだが、本物のアンプのサウンドに強いこだわりを持っている人にとっては自分のアンプで鳴らしてこそ、という部分が多いと思う。一方のスピーカー・シミュレーターが再現するのはスピーカーキャビネットのみ。アンプ部はあくまで本物のアンプを使用するためにモデリングでは再現しきれない「本当のアンプサウンド」をレコーディングできるというわけだ。

スピーカー・シミュレーターとは

まず最初にスピーカー・シミュレーターって何？というところから紹介していこう。製品によってはマイキング・シミュレーターなんて呼ぶこともあるが、これらはアンプヘッドに接続して使うことでスピーカーを鳴らすことなくアンプのキャビネット部にマイクを立てて収録したかのようなサウンドを得られる機材のことだ。

ギターレコーディングといえばアンプのキャビネットの部分にマイクを立てて収録するというのが一般的だったが、これにはいくつか問題がある。まず1つ目は音量。ある程度の音量で鳴らさなければ良い音が鳴らないが、現在の日本の住宅事情で自宅で大音量でアンプを鳴らせる環境を持っている人は希だろう。防音設備や防音ブースなども販売されているが、高価で手軽に導入できるものではない。そして2つ目の問題がマイキングの問題。

マイクを立ててレコーディングを行う場合は選択するマイクの種類はもちろん、スピーカーとマイクの距離や位置が少し変わるだけでもサウンドはまったく変わってくる。こういった緻密で専門知識が必要なマイキングは本来はレコーディングエンジニアの領分。ギタリストなら難しいことを考えずに良い音を出したいと思うはずだ。

このように従来のアンプのマイクレコーディングは決して手軽に行えるものではなかった。そこで登場するのがスピーカー・シミュレーター。実際にスピーカーを鳴らすわけではないので自宅でもOKだし、マイキングについても最適なマイキングポジションのサウンドになるようにあらかじめチューニングされているので難しいことを考える必要がないというわけだ。また、スピーカー・シミュレーターを使うと出力はライン信号となる。そのため、パソコンのDAWソフトやデジタルレコーダー、モニター用にオーディオコンポやテレビなど様々なシステムで再生することが可能だ。

様々な活用法

そんなスピーカー・シミュレーターの主な活用はやはりレコーディングとなるだろう。ただし、使い方によっては自宅レコーディングだけではなくライブにも応用可能だ。使い方はレコーディングと同様にアンプやリアンプのアウトプットをスピーカー・シミュレーターに接続。スピーカー・シミュレーターからPAミキサーに直接ラインを送るというものだ。こうすることでスピーカーにマイクを立てる必要がないので、マイクのカブリ問題を回避することができる。ステージ上にはベース



写真1 今回使用したPalmerとKOCHのスピーカー・シミュレーター



写真2 検証を行って頂いた谷平こういち氏

やドラムの音など様々な音が飛び交っており、そんな中にマイクを置けばギター以外のサウンドも拾ってしまうことはイメージできると思う。このように目的以外の音を拾ってしまうことをマイクのカブリと呼んでいる。

そしてマイクのカブリがあるとPAミキサー側でEQを掛けたときに回り込んだ音がギターを邪魔して思い通りに音作りができなくなってしまうのだ。これはライブレコーディングを行う際にも有効！ライブレコーディングを行う場合はほとんどがPAミキサーからラインで信号をもらうことになると思うので、良い音で録音しようと思うとまずはPAミキサーまで良い音を送らなければならないということになる。そのため、スピーカー・シミュレーターを使って最高の状態の音を取り出すことは非常に意味のあることだ。また、スピーカー・シミュレーターにはフィルターを通さないサウンドを出力する端子が装備されているので、それを使えば通常通りアンプから音を出すことができる。いつもとまったく変わらないセッティングで最高の音を取り出す工夫だ。

サウンドチェック

では、今回テストした3製品それぞれの製品情報と試奏後の谷平氏のコメントを紹介していこう。

Palmer PDI 03 写真の

税込価格：8万6,100円

Van Halenのサウンドシステム等に使用されたスピーカー・シミュレーターの草分けがこのPalmer PDI 03。ユーザーからの復刻を熱望する声に応じて再発売されることになったモデルということだ。ウォーム&ナチュラルなサウンドをシミュレートすることができるのが魅力で、コントロールもVOLUME: FILTERとLINE: OUTのバリエーション・コントロールとDEEP/FLAT、MELLOW/NORMAL/BRIGHTスイッチというシンプルな操作性を実現。思いのままにつまみを回していくだけで高品質なサウンドが飛び出してくる。ちなみにVan Halenはヘッドアンプのスピーカー出力をエフェクターに送るために使用していたようだ。



写真3 パソコンでライン録音して音質を比較/検証した



画像1 録音したオーディオ波形。1つ1つのサウンドは別物だった

谷平：これ、良いね！すごくミュージシャン好みの音がすると思う。このモデルに復刻のリクエストが多かったというのもうなずけるね。ナチュラルで広がりがあるイメージで演奏を手伝ってくれるってイメージかな。ライブでPAからライン出しなんてする場合にはものすごく楽だろうね。

Palmer PGA 04 写真1の

税込価格：8万6,100円

音質とレベルがバリエーション豊富で真空管アンプを直接接続できるロードボックス機能を搭載したラックタイプで、ギターサウンドはキャビネットタイプやスピーカーユニットの他、録音する際のマイクやセッティングの違いを変化させるVOICINGがLOW/HIGH/COLOURの3パターンとFULLRANGE: VOLUME/HI-CUTのコントロールを搭載することで、より細かい音作りに対応したスピーカー・シミュレーターだ。

谷平：コンプというか、エキサイターが掛かったような完成されたサウンドが特徴だね。色々細かい設定ができるから一度録った音を後から細かくいじっていくなんてエンジニア的思考を持つ人向きかもね。ギターの原音トラックをギターアンプで再生するリアンプ・レコーディングに使用しても良いんじゃないかな。

Koch Loadbox LB120- 写真1の

税込価格：6万8,250円

マイクでピックアップしたスピーカーのサウンドをシミュレートするレコーディングアウトはもちろん、スピーカー出力を独自のアッテネート回路でコントロールし、小さなライブハウスやリハーサル等、小音量での演奏を余儀なくされる場合でもPower TubeをフルにドライブさせたTubeアンプ本来のキャラクターを引き出すことが可能なアッテネーター。キャビネットタイプは1発と4発、マイキングはセンターキャップの中心をねらう、コーンエッジに垂直にマイクを近づける、といった基本マイキングを切り替えることができる。

谷平：好みは別として、これが一番Kochのアンプのキャビネットのサウンドに忠実なサウンドだったね。そしてスピーカーの数やマイキングを変えたときのサウンド変化もちゃんと再現できているね。マイキングはちゃんと空気感まで再現できているから驚いた。僕はエッジ側の音の方が好きだったね。

試奏を終えて

テストの結果はいずれもライン録音とは思えない程リアルなものだった。どの製品のサウンドもマイク録音の音とブラインドテストしたらどちらがラインかわからなくなってしまうだろう。また、面白いのがそれぞれのモデルにしっかりとしたサウンドキャラクターがある点。スピーカー・シミュレーターなのだからある程度同じ音がするんじゃないかと思っていたのだが、その予想は大間違いだった。こうなるとマイクを選ぶような感覚に近いと言って良いだろう。

谷平さんの感想も踏まえてそれぞれの製品のサウンドを形容すると、

- ・PGA04：色々な音が作れ適度なコンプ感が得られるサウンド
- ・PDI03：ブライツで、ガッツのあるサウンド
- ・LB120-：品が良く、ナチュラルなサウンドというイメージだ。

最後にPalmerの他のスピーカー・シミュレーターのラインナップを紹介しておこう。Palmer PGA 05 (写真、税込価格：13万1,250円)はPGA 04をステレオ仕様にした製品で、ラックタイプのエフェクトシステムの最終段に使うといった使い方ができる製品だ。ただしPGA 05はダミーロードを内蔵していないので、真空管アンプのスピーカー出力に直接接続することはできない。そしてPDI 09はシリーズ中もっともコンパクトで、リアンプレベルの出力をスピーカーサウンドにシミュレートする製品だ。サウンドはMELOW/NORMAL/BRIGHTの3モードから切り替えることができる。

また、今回のテストとは主旨が少し違うが、番外編としてKochのStudiotone (税込価格：18万3,750円)も紹介しておこう。実は本製品は単なるアンプではなく真空管アンプながらライン出力が可能なモデルだ。丁度コンポアンプにLoadbox LB120-を搭載した...とイメージ。同時にスピーカーはライン出力の音量と関係なくオン/オフができるので、アンプを鳴らさずにレコーディングするサイレントレコーディングが可能だ。Kochのアンプはいずれも同様のラインアウトを搭載しているということなので、Kochのサウンドが好みのギタリストであればこれらをチョイスするのも良いだろう。

今回はスピーカー・シミュレーターを紹介してきたが、どうだっただろうか。アンプシミュレーターとは違い、自分のアンプをライン録音できるということに魅力を感じるギタリストは多いはずだ。しかも環境によって音が変わってしまうということもないので、レコーディングからライブまで幅広く使えると思う。憧れのマイアンプを買ったはいいけど自宅じゃ鳴らしきれない、もっと良い音で録音したい...そんな音に妥協を許さないこだわりギタリスト達の悩みを一発で解決することができるので持っていて絶対に損はないアイテムだ。そして先ほども紹介した通り1つ1つの製品は明確にサウンド特性が異なるので、好みや使用するアンプとの相性などを踏まえた上で選択した方が良いだろう。まず、自分の耳でその効果を確認して欲しい。

テスト環境

今回はSHUREのSM-58をマイキングしたサウンドと、それぞれの製品を使った場合のサウンドをパソコンのDAWソフトにレコーディングしていくことで比較検証を行った。ちなみにDAWソフトにはAppleのLogic StudioとオーディオインターフェイスにはM-AudioのFireWire 1814を、ギターは谷平氏が子供バンド時代からずっと愛用しているという使用63'フェンダーストラトキャスター、アンプはKOCHのPowertone +TS412の組み合わせでヘッドフォンと小型スピーカーでモニターをしながらテストを行った。アンプはテストに使用したスタジオにあったVHTとCUSTOM AUDIO ELECTRONICSのアンプと聞き比べた中で、もっともナチュラルなサウンドだったという理由で谷平氏がチョイスしたものだ。



谷平こういち

元・子供バンドのドラマー、やまとゆう氏と共にGRANITE HOUSE (<http://enjoy1.bb-east.ne.jp/g-house/>)で精力的に活動中。ギタリストとしてだけでなくエンジニアやコンポーザー、プロデューサー、そしてGRANITE HOUSEの所属するノイズオペラレコーズなど様々な顔を持つ敬腕ギタリスト。